新指文字の提案

神田和幸（民博）

１．基本提案

手話検定開始から 20 年。長年の手話検定の結果、指文字と数字はとくに読み取り学習が難しいことが判明している。その原因は後述するが、改定案を以下に示す。現段階では清音は従来通りとする。将来的には、やりづらい指文字や間違えやすい指文字の改革もありうる。

１．１　改定個所

① 運動による変化

長音：下への移動運動

促音：小さいツは短くクリック。突っつく感じ

撥音：ンは使用中の文字でンを描く。

拗音：手の回転方向を変える（同時法にほぼ同じ）

　　小さいヤ＝その文字のまま手前。

　　小さいユ＝その指文字のまま手首裏返し（肘の内転、ユをする時と同じ動き）。

　　小さいヨ＝横向きに裏返し（肘の内転と内旋、ヨをする時と同じ動き）

② 左手の付加（視覚的同時性によりモーラに対応）

濁音：左手で５（パー）（二本指よりやりやすい）

半濁音：左手でO（オまたは小丸＝金）

拗音：左手で文字を示す。小さいア行。

＊左手を付加する場合、先に左手を作り（入り渡り）右手の清音の後、多少残ってもよい（出渡り）

音声対応が進んでいる現状に合わせ、「やりやすい」「みやすい」ことを重視し、音声と同時にできることを優先させる。栃木の同時法（音対応）を進化させたものといえる。

実例：キャ、キュ、キョ。ギャ、ギュ、ギョ。キャン、ギャン。キャップなど

１．２．手話数字との関連

日本の手話数字は指文字との関連が深いので、指文字と同様に考察できる。本論では考察しないが、現実問題として指文字と手話数字の混同がよく見られる。将来的には「これから数字です」「数字はここまで」のようなコントロール記号が必要になってくるかもしれない。そのコントロール記号は同時的に提示されるべきか、継時的に提示されるべきか、まだ検証がないが、発話速度を考えると同時的提示がよいのではないかと思う。試案としては、数字

は片手で示されるので、反対の手が余っている。そこで①簡単な手型である、１や５、拳などを左手（非利き手）で示し、数字の表記中はずっとその手を維持する、などの方法がありうる。あるいは②提示する位置を変え、指文字は右胸前の中立空間で示されるのに対し、数字は左胸前で示す、などの工夫もありえる。

２．指文字の歴史を考える

大曾根式（1931）から 88 年、同時法（1968）から 51 年（大曾根から 37 年）たち、今や改革の時期である。また、ろう運動のくびきからの脱出も必要である。

４．普及と学習法の改革（強形と弱形の認識）

まず、他の文字同様に、強形で練習し、弱形による社会実装（実用）を考える。漢字でいえば、まず楷書を基本学習し、崩した形の行書や草書を習うのに近い。文字学習は基本的にパタン練習学習法であり、漢字学習でいえば、筆順や運筆がパタンでありルールである。そのパタンやルールを繰り返し練習することが学習である。ゆび文字にもパタンがあり、それは指文字の分類として公開されている。濁音はルールであり、これも公開されている。しかし手話学習において、指文字は最初に学習するにも関わらず、学習時間が少なく、それが指文字の習熟度に大きな影響を与えていることは確かである。ここを大いに反省したい。

学習時間を増やす方法の１つとして、アニメなどの教材を活用し、強形の読み取りを練習することも有効であろう。人間が指文字をする場合は必然的に弱形になるため、次のステップとして人間のビデオで弱形の読み取り練習をする。手話教室では教師と生徒、あるいは生徒同士で指文字を練習することがほとんであるから、「目では弱形を認識し、頭は強形で認識する」という練習を繰り返していることになる。

英会話学習において「聞き取りができない」のは弱形が学習されていないことは常識化している。英文の文字を日本語的に発音する場合は、英語の強形を日本語に類似音に置き換えている。発音記号のほとんどは強形の記号化である。当然、日本人の英語の発音は英語の強形の真似であるから、英語話者は理解できる。また日本人同士においてもかなり理解できる。しかし、英語話者は英語教師を除いて強形で発音することはなく、常に弱形で発音するので、その学習をしていないと理解できないのは当然である。普通の英語話者は強形で発音することができない。これはどの言語においてもみられる当たり前の現象である。つまり文字の背後にある音韻と実際の発話の音声とには大きな違いがあるということである。

３．文字の進化

文字は本来、強形を記号化したものだが、現代のようにデジタル化する以前は人間が文字を書いていたから、音形とは無関係に変化していく。これが筆記体である。日本文字は楷書体で輸入した文字を筆記体にする段階で簡略化が進化し、行書体、草書体のような文字を生み出していき、最終的にはカタカナとひらかなを発明するに至った。仮名はさらに進化を続け、連続するようになったため、現代では昔の文書が普通には読めなくなってきている。文

字が進化する一方、発音も変化していく。文字は発音を記述するのが役割だから、文章は発音の変化に遅れて書き取り方も変化する。そのため、現代から昔の発音を推定するには相当な苦労が必要である。いろいろな文献を参照しつつ、その変化仮定を逆に辿るという作業になる。日本には幸いというか膨大な量の文献が残っているので、人力と時間をかけて、これまで、その復元作業が歴史的に蓄積されてきた。諸外国においては、音の変化だけでなく、外国語の侵入という要素もあり語彙変化も大きいため、過去に遡る作業は困難を極める。日本においても明治以降、そして戦後の借用語の増大は日本語語彙に大きな影響を与えており、文字にもアルファベットが入ってきて複雑な様相を呈してきている。

ところが近年、メディアの発達は文字進化に大きな影響を与え、活字印刷の普及、デジタル化によって、書くことが激減してきた。これは「文字の固定化」という現象になる。フォントやロゴといった変化形はあってもベースとなる文字は強形化していると考えてよいだろう。

４．指文字への影響

音声言語の文字が強形に固定化されていくということは、指文字が文字の代替であるかぎり、指文字にとっては変化範囲が狭まることになる。しかしそれで指文字が固定化するかというとそうはならない。なぜなら発音の変化は固定化しないからである。指文字は文字の代替といいつつも、実際には「音対応」という発音の変化にも追従する。指文字が代替しているのは仮名であって漢字ではない。そしてまだアルファベットには完全に対応してはいない、という現状がある。言い換えると変化の余地がかなり残されていることになる。手話者の間では指文字は手話語彙の不足分を補充するという考えの人が多いが、実際には音声に対応するという機能が基本にある。現在、新しい手話という訳語が増産されているが、仮に訳語がほぼ完全に日本語に対応できるようになったからといって、指文字がその時点で消滅することはないと推測される。もし指文字が語彙不足の補充機能しかないとしたら、訳語の充足と共に役割を終えて収束していくはずである。しかし現実には訳語が完全に充足される可能性は極めて低い。現在の外来語への訳語が示すように、補充速度が追い付かない。結局外来語はカタカナ表記か場合によってはアルファベット表記でそのまま輸入されている。むしろその量は増大傾向にある。

指文字は日本語から音形のまま手話に借用するシステムであるから、訳語が間に合わない場合、必然的に指文字表記になる。外来語のカタカナ表記と同じ機能を有している。場合によって外国語がそのまま指文字表記されることもある。現在の手話表現において、その傾向は強くなってきている。

指文字は本来の文字対応の機能から、むしろ音対応の需要に対応せざるをえない状況になってきていると考えるべきである。昔の栃木の同時法は聾教育におけるコミュニケーション手段として、口話と同時にできる手話と指文字という概念で指文字改革を行ったのだが、目的は違っても、今や音対応が手話コミュニケーションに必要なことは誰も否定しえな

いであろう。それは手話通訳の現場だけにかぎらない。対面の場においても、発話速度が求められるようになり、一方で電子メディアの発達により、例えばスマートフォンでの対話がいわゆる「打ち言葉」のような省略的な文体が普及していくにつれ、時間のかかる手話語彙よりは指文字による省略的な文体が進行することは容易に予測される。

１例だが、＜わかる＞という手話語彙に＜り＞という指文字を先行させて＜理解＞という語彙を分化させてきたのだが、スマートフォンによる会話では「り」と打てば機械が自動的に「了解」を提示するため、それも面倒になれば「り」だけ提示すればコミュニケーションが成立する可能性がある。こうした相互理解が普及すれば、指文字で相手に＜り＞を示せば同じ機能となる。こうした変化は現段階では推測の域を出ないが、あるいはすでに進行しているかもしれない。

５．諸問題

指文字が有限個であるから学習が簡単というのは誤解で、実際には組み合わせで無限になり、組み合わせの学習が困難である。英語の綴り学習と似た現象である。濁音等が方向変化しかないため、理論的に一見、動作が簡単と思われるが、実際には組み合わせもあり、動作は複雑になっている。

その原因は当時の製作者が音声学に疎く、強形と弱形の違いが認識されていなかったことにある。指文字は原理としては、音声言語の文字コード変換だが、実際の表示には個性があり、その差異の学習が必要になる。日本語の文字でもいろいろな書体があり、歴史的変化もあり、個性的な癖（筆跡）がある。手書き文字の機械認識は今でも高度な技術である。そして外国人にはなかなか難しい。指文字は文字のように活字やフォントが普及しているわけではなく、ほとんど人間による表示が多いから、手書き文字認識と似ている。そのため長い訓練時間を必要としている。

指文字の改革はろう手話主義者からの反撥が強い。たとえば同時法的手話の指文字は全日本ろうあ連盟などの強い反発により未だ普及していない。手話は元々音声言語からの借用により発達してきた歴史ある。孤島での手話発生の例を除くと、現代の手話を聾者が作り上げてきた自然言語であるという明確な証拠はなく、伝説にすぎない。とくに手話は学校教育から始まったという起源説（全日本ろうあ連盟）は明治以前には手話がなかったという仮説の提唱であり、明治以前のものはジェスチャにすぎないと断定するのは、聾者が作り上げてきたという説明と矛盾する。自然言語の発生は教育とは直接的な関連が薄い。自然言語は教育が未発達であっても成立しており、教育によって語彙の増加などの変化はあるが、発生そのものの要因ではない。手話が教育現場から発生し、聾児同士のコミュニケーションから発生し伝承されたという学習説がアメリカで語られ、それが無批判に日本に持ち込まれた結果であって、科学的根拠は薄弱である。明治時代の聾教育開始は聴者が始めたことが明白で、その手話は聾者と聴者が協働で作り上げていったと見るのが正しい。現在でも、いわゆる日本手話、聾者手話の起源はジェスチャが多く、起源とされる説明は日本語表現を動作で

示したものがほとんどである（大原）。昔の手話語彙はいわゆる借用語であって、独自の語彙といえる語はジェスチャとの類似性が高い。実際、世界の手話がかなり似ている部分はジェスチャ起源といえる。各手話独自の発達部分は音声言語との対応になっている。指文字は各言語の文字対応になっていることは証明されている。

手話語彙に民間語源が多いのは、普及段階での手話学習過程の付加されたものがほとんどで、聾教育黎明期の手話辞典類の手話語源は元々、動作説明にすぎなかった。指文字の起源については製作者である大曾根グループが説明しているが、それも動作イメージの説明にすぎない。指文字表は当然ながら強形のリストである。実際に表示する段階では、指文字の多くが静止画像のため、その静止状態に至るための予備動作（入り渡り）と静止が終わって次の動作に移る動作（出わたり）がある。そのため指文字を連結させたり、動きを加えると手の形、位置は変化する。その変化が同化である。同化による変化形が弱形である。従って弱形にはいろいろな種類（変異形）が存在する。その学習は意外に大変である。

無論、変化パタンには規則があり、音声言語の場合、これを音法と呼ぶこともある。指文字の場合、音法と呼ぶのは正しくないので、同化あるいは弱形という専門用語を使うか、変化形と一般化するか、の選択が考えられる。ただし理論に興味をもつのは教師くらいであろういから、学習者にはすべての組み合わせを示しておくのが現実的である。
この組み合わせには頻度の差がある。よく使われる組み合わせと滅多にない組み合わせがあるので、頻度の高い組み合わせから順に学習するようなカリキュラムが必要である。

学習法としては頻度の高いと思われる組み合わせの例（弱形）を示ことが正しい。本論は紙幅の都合もあり、その実例の提示は後日の課題としたい。